

## 岩倉使節団と国民国家形成

杉橋隆夫  
本郷真紹  
山崎有恒

### はじめに

本研究は近代日本国民国家形成において、岩倉使節団が果たした役割を再検証しようとするものである。

ここ数十年岩倉使節団をめぐる研究は大流行してきたが、その多くは岩倉使節団が訪れた場所や見たものなどを明らかにする個別研究であって、同使節団と国民国家形成の関係を正面に据えた研究はほとんどないといってよい。

しかし一年半にわたって政府首脳部が欧米を巡遊し、帰国後日本の国民国家形成を指導していったことはまぎれもない事実である。しかも彼らの多くは初の西欧体験であった。この巡遊を通じて、初めて出会う西欧の「文明」の前で彼らがいかなる衝撃を受けていったのか、そしてそれをどのように乗り越えつつ、いかなる国民国家形成を志していったのかを明らかにすることは、国民国家形成の原点を探る上で重要な作業なのではないか。

本稿ではこの問題にアプローチするために、アメリカ西部の大荒野における使節団の動向に着目する。大都會サンフランシスコで大歓迎を受けた使節団が、その後一ヶ月近く西部の大荒野を旅する中で一体何を感じ、何を考えるに至ったのか。そしてそれは後の国民国家形成にどのようにつながっていくのか。

本研究の特色は、それを探るために、文献・史料を細解くのではなく、実際にアメリカ西部を旅することで、使節団の人々が受けたであろう衝撃を追体験してみようとしたことにある。色川大吉以来、こうした現場主義・実地主義的アプローチをする研究も少なくなつたが、今回はあえてそうした手法を取る。なぜなら近代化されたとはいえ、アメリカ西部には今もお当時そのままの大荒野が広がり、人々の気質も風土も文化もある程度原形をとどめているからである。そこを旅することで使節団の人々の心象風景に少しでも近づき、彼らがやがて国民国家形成を決意するに至つた過程を理解したいと考える。

以下第一章ではこれまでの岩倉使節団をめぐる研究を整理し、筆者がなぜそうしたアプローチをする必要があると考えるに至つたかを示す。そして第二章では実際にアメリカ西部の大荒野を旅する中で私たち一行が感じたことを通じて、使節団の人々の受けた衝撃とその意味を推察し、彼らがやがて国民国家形成の起点に立つていく過程を明らかにしていきたい。

## 1. 岩倉使節団の研究史

本章では、特に戦後の明治維新史研究の中で、岩倉使節団がどのように取り上げられ、位置付けられてきたかを整理し、近年の岩倉使節団研究の流行に至る道筋を明確にするとともに、本研究がそれに対して何をアプローチしようとし、何を課題としているのかを明確にしていきたいと考える。

### a. 明治維新史研究と岩倉使節団

太平洋戦後に本格化した明治維新研究は、当初講座派の手によって進められたが、これは「西洋中心主義的な世界史像」でありながら、「一国的視点が意外に強く」、「内発発展に力点を置く」傾向が強かつたため、特に社会経済

史的研究に大きな成果を残した。その中で明治維新は、絶対主義政権の成立<sup>11</sup>封建支配層の自己変革であるとする視点が打ち出され、その起点として天保期の動きに注目する研究が相次いだ<sup>14</sup>。当然この流れからは岩倉使節団を重視する傾向は生み出されず、同時期にはさして見るべき成果を生み出すには至っていない。

やがて昭和三十年代に入ると、対外的契機（具体的には外圧や対外接触）へ研究の主力が移行していく。いわゆる昭和史論争の影響で、それまでの社会経済史偏重へ疑問が投げ掛けられ、政治史研究の進展が促された。そしてその中から例えばペリー来航を近代の対外危機の象徴として重視し、嘉永期を起点として始まった変革にターゲットを合わせた研究や、<sup>12</sup>同時期に西南雄藩において形成されつつあった新しい政治主体の分析を進めていく研究などが登場してくることとなる<sup>13</sup>。しかしここでもまだ岩倉使節団への重視は生まれない。総じてこの時期の研究は、新政府成立後の動きに関しては弱かった。

その後明治維新研究は、二つの潮流に分化していく。まず丸山真男を中心とする人々は、維新の動力を、経済社会の変化から、人間集団・諸階層多岐の政治活動へ移行させて検討を深め、「前期的国民主義」の成長過程や「国民」そのものの形成をも視野に入れつつ、実際には特定の政治エリートや代表的思想家の研究を進めていった<sup>14</sup>。

一方で佐々木潤之助に代表される人々は、マルクス主義の底流にある人民闘争史観を継承し、政治エリートや代表的思想家の研究に傾斜する前者の動向を批判しつつ、民衆史、民衆思想史の研究に取り組んだ<sup>15</sup>。そして「欧米モデル」に安易に流されがちだったそれまでの研究動向に批判を加えつつ、自己モデルの構築を次第に課題とするようになる<sup>16</sup>。

この両者の潮流はやがて期せずして日本型国民国家の形成過程をターゲットにするようになる。アメリカを中心に始まった明治維新の再評価（「近代化論」の登場）にも影響を受け、それへの反発などから、むしろ政治主体による民衆操作の怖さ、その中で民衆の「疎外」状況が形成されていった過程などが描き出されていった。その基盤は「近

代化」批判の精神だったと考えられる。

さて日本型国民国家形成過程を分析するためには、当時の政治エリートの大部分が参加し二年近くも欧米を歴訪した岩倉使節団の影響力、すなわちその後の国民国家形成への道筋の一つの起点としての使節団の役割が、この段階で重視されていても不思議ではなかったのだが、当時の研究者の多くが、「西欧化」「近代化」に対して否定的な見方をしていたこともあって、岩倉使節団研究は歴史学の主要ターゲットとはならなかった。そこに現代に至るまで欠落してしまった、この使節団をめぐる、ある種の研究の空白が存在している。

七十年代以降に入り、維新史研究に新たな動向が生まれてくる中で、岩倉使節団も初めてここに大きく脚光を浴びるようになる。

まず石井孝の切り開いた道を通って、国際関係・外交交渉過程分析の進展が見られ、当初ペリー来航・不平等条約締結過程を中心としていた研究は、その前後に展開し始めた。そしてその流れの中で幕末の使節団、留学生などの研究が流行し、岩倉使節団も初めてクローズアップされた。<sup>⑤</sup>

一方、丸山真男が切り開いた、近代への移行の中で生じた価値転換を重視する視点は、その後形を変えながら受け継がれ、西洋の与えた衝撃が日本に何をもたらしたのかを説明しようとした佐藤誠三郎『死の跳躍』を越えて西洋の衝撃と日本』（都市出版、一九九二年）など、トップリーダーの意識変革にターゲットをあてた研究が出現するようになる。こうした意識変革こそが、やがて彼らの手で日本型国民国家形成がなされていく際の一つの大きな動機付けとなるのであり、従って岩倉使節団の研究もここで大きく進展しなければならなかったのであるが、実際にはこの段階でもまだそういう視点での注目は数少なかつた。

むしろこの時期に大きく進展したのは、政治過程分析に純化した研究群であり、山川出版社の『年報・近代日本研究』を主要誌とし、坂野潤治、宮地正人らを中心に詳細な過程分析が相次いだ。そしてこの中から、明治六年政変の

前段階として岩倉使節団が登場してくるのである。

こうして時代の影響を受けつつ多様な展開を遂げてきた歴史学は、いよいよ国民国家論の隆盛を迎えることとなる。

#### b、国民国家論の登場

八十年代以降急速に広まった国民国家論は、当初フランス史研究家である西川長夫らにより西欧歴史理論の導入という形で進められたが、次第に日本型国民国家の特質とその形成過程を追う議論へと変化を遂げていった。

この国民国家論には様々な分野から研究者の参入が見られ、その後次第に研究は細分化し、文化・社会・思想などあらゆるテーマを題材として日本型国民国家の形成が論じられる状況を生み出している。これは明治維新を何らかの変革ととらえる人なら、誰もが安易に入ってこられる広さを持つ理論であったこと、すなわち各自の解釈に基づき、自分の問題関心の理論化に利用可能な便利なものであったことが原因となっていると考えられる。

しかしながらそうした窓口の広さは、次の二つの点で問題点を生じている。

第一に、共通の概念規定などが皆無であるため、国民国家論相互の議論が噛み合わないケースが多々見られる。

第二に、明治維新以降の「近代化」をどう評価するか、という発想の原点に近い部分ですら共通の理解を持たないため、この国民国家形成過程をマイナスに評価する人とプラスに評価する人が混在し、そうした立場の違いが、議論に微妙な不協和音をもたらしている。例えば前者に関しては、今西一などこうした動きを民衆にとつてのマイナスの始点（マルクス主義歴史学でいうところの「疎外」の始まり）ととらえ、それが社会の各分野でいかに演出され、作られたかを明らかにしつつ、七十年代以来の主要研究動向である民衆と国家の相剋の一つの展開としてとらえられている。一方で後者は、特に技術史分野の人々などを中心に、日本の各分野がいかに近代化（＝進歩）したかを解明していくための基礎作業としてこの理論を導入し、具体的な装置の導入や、それをもたらした人の功績が評価の

対象となる傾向がある。

このように現在では「国民国家論」「日本型国民国家の形成」は大流行ではあるが、そこには議論のベースとなる共通の基盤もなく、各自の視点がばらばらに交錯する中で、「なんとなく」理解が成立しているかのような印象を拭えない。そしてこうした視点の交錯は、そのまま岩倉使節団研究においても生じているのである。

く、岩倉使節団の研究史と本研究の課題

さて、以上のような戦後歴史学の展開の中で、岩倉使節団研究がどのような取り上げられ方をしてきたかを整理してみよう。そしてそこにひそむ問題点と、それに対して本研究が何を付加し、何を説明しようとしているのかを明らかにしたい。

まず維新史研究の初期段階では、岩倉使節団は、外交史の一部として描かれてきた。例えば高校の教科書でよく見られるような、「条約改正の第一歩だったが、失敗した」とするものが多かったように思われる。

そうした状況に大きな変化をもたらしたのは、一九七五年に岩倉使節団の公式記録であるところの『欧米回覧実記』(それまでは奇観本であって滅多に入手できるものではなかった)が復刻されたこと、そしてさらにその後岩波文庫版になったことであった。これにより同史料をたやすく座右に置くこととなった各研究者が、競ってその分析に参入し、岩倉使節団研究は突然爆発的に研究が進み、脚光を浴びることとなった。

この過程で、岩倉使節団は単なる条約改正の一使節団という位置付けを超え、政府首脳の多くが揃って欧米を歴訪した最初で最後の大使節団として、その後の近代国家(日本型国民国家)形成上の役割を再評価されるようになった。特に欧米の文化・技術・知識などの吸収にどのような効果があったかが議論の中心になっていった。

この皮切りとなったのは大久保利謙編『岩倉使節の研究』(宗高書房、一九七六年)であったろう。岩倉使節団

は日本の近代国家形成に大きな寄与を果たしたとの立場を明確に打ち出し、この使節団が、(1)何を見て、どう感じたのか、(2)何を取り入れ、何を取り入れなかったのかをテーマに行われたこの共同研究は、その後の岩倉使節団研究に大きな影響をもたらし、従来とは違うメンバーの多数参入とそれによる研究の学際化・国際化、さらに研究の果たさない細分化が始まった<sup>⑦</sup>。この流れはやがて日本型国民国家形成の起点をこの使節団に求める視点を生み出し、国民国家論の隆盛と共に幅広く論議がなされている。

しかしながら多くの国民国家論がそうであるように、こうした傾向の研究も次第に細分化していき、岩倉使節団を契機として社会のどの分野がどのように変化してきたかの個別分析が著しく増加し、全体として岩倉使節団の果たした役割を論じる視点が薄くなってきている傾向が見られる。特にその後の日本の「近代化」をリードしていった大久保、伊藤ら政府首脳部がこの使節団への参加を通じて受けた衝撃、そこから始まる政府構想の変容といった分野に関しては、極めて研究の蓄積が薄い。

また久米邦武の執筆した『米欧回覧実記』に寄り掛かりすぎ、そこに示された視点のみを忠実に引用しながら、「岩倉使節団の見た」といった分析を行っているものが枚挙に暇ないが、筆者の久米自身も初めての欧米に衝撃を受けつつ、必死でそれを消化吸収し、最終的に帰国後ようやく達し得た境地がこの史料に示された世界であったという点は忘れてはならず、現今の研究によく見られるような『米欧回覧実記』の無批判での使用は極めて危険だと言わざるを得ない。久米についても使節団への参加を通じて受けた衝撃がどのようなものであったか、他の政治指導者同様にとりよりそれ以上の重要性を持って検討にあたらねばならないだろう。

一方で、明治初期政治史研究からも使節団の再評価は与えられた。特にその中心となったのは、「明治六年政変」の前段階としてこの使節団を位置付けようとするもので、使節団と留守政府の対立を、思想ではなく権力闘争で描こうとした毛利敏彦<sup>⑧</sup>などが挙げられる。もっともこうした研究では、岩倉使節団は単なる政治上の出来事であって、政

府首脳部が欧米歴訪の中で何を学び、自分達の政治構想をどのように変容させつつ組み立てていったかという思想史的分析はあまり見られない。

これに対して坂野潤治は、この対立を国家構想の違いから描こうとしたが、結果的にどのような構想となったかについては検討があるものの、その形成過程については毛利同様に極めて分析が薄い。総じて政治史分野の研究者の多くが、政治過程分析に偏重してきたことの弱点はここにあり、登場人物の思想的な分析が欠落しているために岩倉使節団の果たしてきた役割が押さえきれない所がある。

以上の整理から、今後の岩倉使節団研究に不可欠な要素は明らかとなる。

第一に、その後の日本の「近代化」「国民国家形成」の中心的役割を担っていくことになる大久保、伊藤ら政府首脳陣がこの欧米歴訪を通じていかに衝撃を受け、自らの思想を変容させつつ、日本の未来像をどのように構築していったのか、そしてそれは日本型国民国家形成においていかなる役割を果たしていったかが検討されねばならないだろう。

こうした検討については、不思議とその後政府の中心を離れていくことになる木戸孝允に関してのみはあるのだが、<sup>⑩</sup>まだ絶対的にその蓄積が足りない。

第二に、『米欧回覧実記』という一級史料の史料批判が進められねばならない。そしてそのためには、久米の一人の歴史学者の認識が、初の欧米歴訪の中でどのような変化を遂げ、それが最終的にいかなる欧米観となつて帰結していったのが明らかにされねばならないだろう。久米は他の理事官と違って、ある種目だけに目を奪われることなく、使節団全体の動向に目を配り、また「欧米とは何か」という一番大きな命題と向き合い続けた人物である。それだけに彼の欧米理解がどのように進み、最終的にどのような形に落ち着いたのかを明らかにすることは、極端な話、今後の岩倉使節団研究の在り方すら左右するだけの重要性を持つものと考えている。

さてサンフランシスコに到着した使節団は、当初近代文明の粋のような都会の中で、徹底した歓迎を受け、地に足のつかない状態に追いやられたというのは、これまでの研究でよく知られている。この段階である程度冷静だったのは木戸くらいで、後は初めて触れた欧米に圧倒されるか、極端な嫌悪感を催すか、いずれにせよかなり極端な精神状態に追い込まれていた。『米欧回覧実記』ではその冒頭から冷静なタッチでの記述が続くが、それはあくまで帰国後にそれまでの行程を振り返って再構築したものであって、肝心の久米自身もサンフランシスコ入りした直後からかなり高揚した感情にとらわれている。

それでは使節団はいつ冷静になって、欧米の文明を単なるあこがれの対象から相対化すべき相手へと変化させることができたのであろうか。そしてそのきっかけとなったのは、彼らのいかなる体験によるものなのであろうか。そしてそうした相対化の中で、彼らは日本の未来像をどのように模索し、構築していったのか。これはまさしく、「日本型」国民国家形成が、その主たる担い手たちによって、単なる西欧の模倣・導入を超えた、一つの「確信」として成立し、その原型が作られていった瞬間を解き明かすことにつながる。そしてそれはこれまでの研究においてもっとも欠落し、エアポケットとなってきた部分でもある。

本研究は、以上の問題意識に基づき、岩倉使節団を一つの萌芽として日本型国民国家形成の原風景がどのように構築されていったかを明らかにしようとするものである。特に冷徹な視点で欧米文化をいち早く相対化し、使節団全体の方向性のある程度規定していったと考えられる、考証家久米邦武の欧米理解がいつの段階でどのようにして完成に至っていったか、それが後の日本型国民国家形成とどのような関わりを持っているかについて、解明したいと考えている。

## 2. 岩倉使節団を追って 北米大陸横断

本研究の特色は、研究分担者の三名が、岩倉使節団のたどったルートを追って実際に北米大陸横断を試みたところにある。当時から一〇〇年以上の歳月は流れたものの、自然の風景、産業、人々の意識、風土、文化などには、依然として変わらぬものがあり、それを実際に肌で感じながら、使節団のたどった足跡を詳細に追いかけて、約一か月ほどをかけてゆっくりと大陸横断することで、『米欧回覧実記』の記述だけではつかみきれない、使節団の人々の内面的変化、意識の変遷を追体験できるのではないかというのが、その最大の狙いであった。

かつて色川大吉は、秩父事件の研究を行うに際して、実際にお腹のすいた状態で、薄着で極寒の秩父盆地に立ってみて、当時の民衆たちが拳兵するに至った感情の動きを追体験してみたという。昨今歴史学においては、そうした漠然とした研究方法はなるべく排除される傾向にあり、史料を優先させた実証手法が多く用いられるが、岩倉使節団のように、外国に出かけた日本人が、何を見て、何を感じ、いかなる衝撃を受け、どのように考えを変化させていったかを知るためには、実際にその風景の中に身を置いてみるものが不可欠なのではないか。本研究ではこうした考えに基づき、色川大吉の手法を継承しつつ、併せて全米各地に残された新聞史料その他の収集につとめることとした。

こうした試みは過去の研究者によってもなされたことがある。岩倉使節団研究の草分け田中彰氏は、サンフランシスコから始めて、使節団の訪れた主要な都市をめぐり、その成果を『脱亜の明治維新』<sup>12</sup>にまとめている。しかし割合短期間に、岩倉使節団の全行程をカバーしようとしたために、都市から都市へとピンポイントで渡り歩くこととなり、例えばアメリカ西部の荒野の中で、使節団が何を見て、何を感じたのかといった部分は、ほとんど欠落している。最初に述べておくならば、私たちはこうした移動の途中にこそ、使節団が文明の来襲に対して冷静さを取り戻し、欧米を相対化していった最大の鍵があったと考えている。そしてそれは本研究のようにディテールにまで踏み込んだの

地踏査を行わなければ分らないのではないかと私たちは考えたのであった。

私たち三名は、プリンストン大学東アジア学部長マーティン・コルカット氏（『米欧回覧実記』の英訳者として知られる日本史の専門家）の協力を仰ぎ、サンフランシスコでワゴン車一台を借り、同氏とその夫人、並びに京都大学名誉教授大山喬平氏を加え、総勢六名の調査団を編成し、使節団のたどったルートに忠実に後を追ひ、彼らの訪れた場所はなるべく訪ねてみることをモットーとして旅を続けた。

それではその成果について、報告していきたい。

#### a、文明の「衝撃」―サンフランシスコ

一九九八年八月末にサンフランシスコに降り立った私たち一行は、使節団の宿泊したグラントホテル、食事をしたクリップハウス、彼らの見たウッドワードパーク、アルカトラズ砲台などを訪ね、その関連史料をサンフランシスコ市立図書館の歴史資料室で収集した。

サンフランシスコは当時からアメリカ有数の大都市であり、ここで大歓迎を受けた使節団は天にも上る気持ちになる。例えば宿泊先のグラントホテルについて、『米欧回覧実記』はその高層なること、装飾の美しき、灯明の輝かしさを称えつつ、「部屋客座ヲ飾リタルカーペットチェア、爛燦トシテ目ヲ眩シ」（『回覧実記』岩波文庫版、(一)79頁）とまさしく「目眩まし」状態に陥っていることを正直に述べている。この段階で冷静さを失っていなかったのは、事前に欧米に関する情報を熟知し、ロンドン帰りの井上馨らに話を聞いていた木戸孝允くらいであり、その他の人々はクリップハウス（現在も営業を続けているクラシックな豪華レストラン）などで接待攻勢に会い、予想もしない歓迎ぶりに酔いしれ、サンフランシスコの大都会ぶりに目を奪われ続けていた。

それでも随行の各理事官、書記官らは彼らの任務を果たすべく、それぞれの取り調べに従事して行くのであるが、

見るもの聞くものすべてが圧倒的な存在感を持って彼らに迫り、その消化吸収に追われることとなる。

彼らの見たウッドワード公園は現在では市街地となっていたが、史料館で見つけた当時の写真、記録によれば、当時としてはかなりの規模と設備を持ち、博物館、美術館、動物園、植物園に野外劇場などを併設した総合レクリエーション施設であった。当時の日本には、こうした市民のための総合施設が一つも存在しないこと、しかしながらサンフランシスコでは日曜日になると人々が大挙してこの公園を訪れ、社会教育上実に有用であることを知って使節団は驚いて『ILLUSTRATED GUIDE and Catalogue Woodward's Gardens, 1875』

こうした文明の「衝撃」はその後、カリフォルニアの州都サクラメントに至るまで一貫として続くことになる。

サンフランシスコを出た一行は、郊外のストックトンの町で当時最新の精神病院を見学する。現在も当時のままの姿を残している同病院は、緑に包まれて美しい施設の点在する素晴らしい環境であり、現在の日本の精神病院を知っている私たちにとっても感動的な施設であった。まして精神病者が出れば座敷牢に入れる程度の対処法しか持たなかった当時の人々にとっては、どれほどの衝撃があったことだろう。『米欧回覧実記』はここでもかなりのスペースを割いて、その設備について詳述している(『回覧実記』岩波文庫版、(一)115頁)。

サクラメントに入ると彼らは今度は立憲政治、特に地方分権について考えさせられることとなる。州政府、議会の建物は現在でも当時のまま残り、そのまま政治の場として使用されつつ、人々に傍聴の機会を与えるなど一般市民に開かれた場所になっている。現代の私たちにとっても、思わず記念写真をたくさん取りたくなるほど美しい施設であったが、当時の使節団にとってはその驚きは現代に数倍するものであり、彼らはこれがたかが「一藩」の藩庁に過ぎないことを知って、愕然としている。

かくして「文明」は彼らの前に圧倒的な存在感をもって立ちはだかった。さすがに冷静な記述で知られる『米欧回覧実記』も、ここまでではひたすら詳細な記述を繰り返すのみであり、使節団一行の受けた衝撃の深さをうかがい知る

ことができる。

それではそうした衝撃は、いつどのようなことをきっかけに薄れ、やがて彼ら使節団の間に文明を相対化する視線が生まれくるのだろうか。もう少し彼らとともに旅をしていこう。

#### b、文明の裏側へネバダ州

サクラメントを出ると、道はがぜん山道となってくる。そして有名なシエラネバダ山脈の峻険が立ちはだかつてくるが、これこそアメリカの大陸横断鉄道開通に至る最大の難関、難所であった。大陸横断鉄道が完成し、アメリカ大陸を東西につなぐ大動脈が完成したのは使節団が当地を訪れるわずか数年前のことであり、彼らは完成したばかりの鉄道を特別の車両に乗って旅していくこととなる。

サクラメントの鉄道博物館ではその当時の史料が多数展示され、シエラネバダ越えの苦勞が切々と語られていたが、それは使節団にも分かっていたようで、雪山の中のトンネルで一夜を明かしつつ、彼らはこんなところに鉄道を通じたことについて感心している。

こうして使節団はアメリカの大自然の中で、「文明」が形作られていった際の「苦勞」を知ることとなる。自分達が圧倒された「文明」も簡単には作られたわけではなく、多くの苦勞を重ねながら少しずつ形成されていったことを知り、彼らの中で文明は圧倒的な存在から一つの目標へと切り替わる。ここに相対化の第一歩が見られる。

シエラネバダ山脈を抜けると、今度はひたすら砂漠が続く。さしもの『米欧回覧実記』も、この荒涼とした光景には次第に口数が重くなっていく。風景描写の代表的なものは次のような記述である。(『回覧実記』岩波文庫版138頁)。

山はみな嶮断たる岩嶂にて、土色黄赭に草木も生せず、枯燥して潤沢なし、皺皺は奇髣を露し、湖に映して気色

をなせとも、素然として風致なし、四顧の野は、蒼々莽々として、漠野の光景、殊に荒寥を覚えたり

私たち「文明世界」の住人たちにとつても、ここを抜けるまでの数日間は衝撃的だった。草木は一本も生えず、山は岩肌をむき出しにさらし、そこへ夕陽が差し掛かると山全体が紅く燃え、その中を白頭鷲やら禿鷹らが舞つ光景は、筆舌に尽くしがたく、ただただ呆然とたずむのみだった。当然ながら主要な産業は今でも牧畜と鉱山ぐらいいしがなく、刺激を求める人々は唯一の楽しみであるギャンブルに興じる。そのためネバダ州においては、ラスベガスやリノを筆頭に、街という街にカジノがあり、他に娯楽施設はほとんどないという凄まじいところばかりだった。

重要なのは、この風景がおそらくそのままの状態で使節団の目に映っていたらうということである。これに比べれば間違いなく当時の日本の風景の方がまじだつたはずだった。先に引用した彼らの記述もそれを裏付けている。サンフランシスコという文明の粹のような町からいきなりこんな凄惨な所に放り出された使節団は、あきれ、驚きながら次第に冷静さを取り戻していく。

そうした冷静さは、各地で人々と出会つた経験によつてももたらされた。

途中の町で彼らは劇場に立ち寄る。この劇場は出し物が不人気で、ほとんど人が入っていない悲惨な状況だったが、使節団の観劇予約を受けると、劇場主はすかさず新聞に広告を打ち、「確かにこの出し物はひどい、だが明日だけは来る価値がある。なぜなら日本人という珍しいものを見ることが出来るからだ」と宣伝、これが功を奏して、当日は満員の入りだつたという話が、当時の新聞に記されていた。

それまで彼らは劇場にいくにしても、最高の芸術を楽しむ人達の間、一時の客として訪れただけであり、そこには彼らとは異質の娯楽空間が厳然として広がっていた。だがわずか数百里都会を離れただけで、突然自分達が娯楽空間の主役になってしまう事実を知つた時、彼らの間で文明の意味は音を立てて変容していった。教養がある優れた民

族アメリカ人。それはこの国すべてを覆っているわけではなく、そこには地域差が存在しているということ。それをどうにか一つの国としてまとめ上げているアメリカという国の「苦勞」を彼らは知る。

翻つて考えるに、当時の日本も同様に長い封建制度の影響で、統一したもののまだ一つの国とはとてもいえないほど、各地の社会も思想も文化も風俗も人情も異なっていた。これにいかにして一つの標準を設定して、その下で国民統合を進めていくかは、彼らにとって大きな課題だった。そしてこれこそが日本型国民国家形成といわれるもの原点にほかならなかった。

アメリカ西部の劇場で出会った、出し物そつちのけで彼ら使節団の一挙手一動作に注目する人々の姿は、彼らがサンフランシスコで出会った「文明」の衝撃を少しづつ薄めていく。そして冷静さを取り戻していった使節団は、次第にアメリカという国の文明化の歴史を相対的に眺めるゆとりを生み出していく。延々と続く車窓の荒涼とした風景の中で、そうした考え事をする時間は彼らにいくらでも与えられていた。

同様な体験は他にもあった。ネバダ州のバトルマウンテンという人口わずか数百人の町で私たち一行は宿泊し、翌朝町の小さな小さな開拓史料館を訪ねたが、ほとんど掘っ立て小屋同然のその史料館には驚くなかれマイクロフィルムリーダーがあり、岩倉使節団が通過した当時の新聞記事がマイクロフィルムとなって保存されていた。それを見ていくと、使節団がこの町を訪れた際の記事があり、彼らの行動記録に続いて「What Japan is」(『The Reno Crescent』 Feb. 10, 1872) という特集記事が組まれていた。これをよく読むとよく分かるのは、当時のこの町の人は日本という国についての知識がほとんどなかったということである。日本についての情報の大部分は、彼らに随行していた日本公使デロンクが新聞記者に語って聞かせたことであり(『The Jap.』 回覧. Feb. 3, 1872) それがなければ彼らには何一つとして分からなかった。そもそもこのあたりの多くのの人にとってアジア人とはイコール中国人であり、使節団についての新聞記事の中には、彼らを中国政府から派遣されたと書いているものすらあった。こういったレベルの人々との出

会いも、使節団に先の劇場体験と同様の感懷を与えたことだろう。

そしてこうした感懷の決定打となったのは、紛れもなくモルモン教徒とアメリカインディアンとの出会いだった。これについては節を改めて論じていこう。

### c. 同化の方程式―モルモン教徒とアメリカインディアン

ネバダ州の砂漠と荒野を越えた使節団一行は、やがてユタ州に入る。このユタ州は現在こそ州であるが、当時はまだ部であって、州の仲間入りを認められていなかった。それというのもこの地が異教徒の住む土地だったからである。教祖ブリガムヤングに率いられたモルモン教徒の一行がこの土地にたどり着いたのは、使節団がこの地を訪れるわずか数年前のことだった。同じキリスト教の一派でありながら、その排他的な教義から人々の攻撃にあい続けた彼らが、安住の地を求めて各地を流転しながら、ようやくこの土地にたどり着いたのは西暦一八四一年のことであり、それからわずか二三十年の間に彼らは巨大な宗教都市を築き上げようとしていた。

使節団一行が州都ソルトレークを訪れた時には、中心となるテンブルはまだ工事中の段階だったが、それでもこの教団の持つ勢力の大きさに驚き、さらに教祖ブリガムヤングに面会して、妻が十六人、子供が四十八人いることなどを知り、自分達の知るキリスト教とはまったく異端の宗教の存在に愕然としている。

この段階ですでに完全に冷静さを取り戻しつつあった久米邦武は、キリスト教の歴史を振り返りつつ、それが布教と称しつつアジア各国の植民地化を進めてきたこと、旧土人（インディアン）に対しても「何らの自治も正義も与へぬし、インディアン種族のオレゴン部族に対しては砲台を築いて之を排除した」と非難し、これこそがキリスト教国民の「真相」だとまで論じている。<sup>⑬</sup>そしてそうした宗教だからこそ、改革の必要があつて各宗派が生まれ、ついにはこのモルモン教のような「邪教淫祠」<sup>⑭</sup>が興るに至つたのだと論じている。

モルモン教については、私たち一行も、ソルトレーク市の歴史史料館、モルモン教博物館やブリガムヤングなどを訪ねて様々な資料を収集したが、使節団の来訪当時はかなりエキセントリックな教義を展開していたようで、例えば一夫七妻理論<sup>15</sup>や現在も続くカフェインやアルコール摂取の禁止のように、明らかにキリスト教とは一線をかくす内容が少なくなかった。このため中央政府から弾圧を受け、ブリガムヤングも自宅軟禁中（使節団が去った翌年脱走）であり、現在の教徒以外への布教禁止という処分もなされるなどかなり厳しい状況下に置かれていた。

ソルトレークの町は、大地が大量の塩分を含んで白く、農業などには適さないため、この地の産業は鉱山（銅と銀）と牧畜、そしてそれを利した羅紗製造であった。ブリガムヤングはその大部分を掌中に収め、莫大な利益を得て、それを教団の経営に注ぎ込んでいた。草木の生えぬ果ての地に聖なる宗教空間を現出するためには教団の施設がみずばらしいものであつてはならない。従つて建設中のテンプルもすでに作られていた他の教団施設も豪華そのものであつたが、この段階でもはやそうした飾られた「文明」には一切目を向けていない久米の姿に、そこまでのネバダの荒野がもたらした役割の大きさを思い知ることができよう。久米はむしろこうした「邪教淫祠」をも含み込みつつ「文明」が成立していく過程に目を向ける。そしてそれこそ宗教各派に対する敵しい対応と国家宗教の形成であり、それは様々な民衆宗教の混在する日本を一つの国民国家に仕上げていくために不可欠な装置として導入されていくこととなる。

さてそれでは次に、使節団とアメリカインディアンとの出会いについて論じていこう。ネバダ州に入ったあたりから、使節団の一行は不思議な形状をした部落が点在することに気付き始める。『回顧録』では久米はその様子を次のように記している<sup>16</sup>。

山岡の崖下に土人が穴居して小村をなしているが、住居の内景は草を束ねて上部を覆い、内部は球形をなし、其の半球は地を掘って入り、半球は草を被つているといふ

この土人達に興味を持った久米らは、駅の売店で彼らを描いた絵葉書があればそれを購入し、またアメリカ人から彼らについて情報を求めるなど、随所で知識を仕入れた。そしてそうした好奇心に一気に火がつく事件が起きる。それはソルトレーク郊外のダグラス砲台を一行が訪ねた際に、その将校から東久世通禧侍従長がインディアンについて説明を受け、古来千島方面に居た現住民が、その後ベーリング海を渡ってアラスカに入り、現在のインディアン祖先になったとの情報を得たことによる。これを受けて議論は沸騰、まさかあの大海をアイヌが渡るとは思えない、いや彼らの顔立ちが確かに私たちに似ているといった会話が交わされつつ、次第にインディアンはアイヌの末裔だったということに話がまとまっていく(『回顧録』 214-215頁)。

久米は『回顧録』にその説を引きつつ、ついには「我が奥羽地方で古代から熟蝦夷、鹿蝦夷、津軽蝦夷等と数種の民族が時代について変る様であるので、蝦夷は消える人種といはれているが、消える訳はない、他に転移するのであらう。蝦夷、肅慎の民族は、或る程度まで其の地に土着繁息し、利便の良地を覚めると、之に転徒するので、古代より白令(ベーリング)海峡の陸路と、千島の舟路に依り、軽く米大陸に進入したことは疑ない」との結論に達している<sup>17)</sup>のである。

かくしてインディアン問題は、少なくとも使節団の意識の中では、きわめて自分達に密接な問題へと発展する。アメリカという国がこうした人々をどのようにして統合し、同化させ「国民」に仕上げていくか。そこに彼らは興味を持ち始める。

以上のように、彼らは、ネバダ州の砂漠の中で、次第に冷静さを取り戻し、アメリカとその「文明」を相対化する余裕を得た。そしてアメリカという国が、多くの風習と文化と宗教と思想の違いを持つ人々を抱えつつ、それを統合し、一つの「国民」に仕上げていったのはなぜなのかについて考えるようになり、モルモン教とインディアンを題材に、その問いに対する答えとなる、ある種の確信に至っていくこととなる。

d、岩倉使節団と国民国家形成

久米はこの旅行のかなり初期から、学校制度、というよりも幅広い意味での社会教育制度に着目し、それへの視察を繰り返している。そして多種多様な学校が身分に合わせて点在している日本の状況と比べて、アメリカの学校制度がかなり統一的なシステムを持っていることを知り、それが一つの「国民」を生み出していく上で、何らかの効果を發揮しているのではないかとということを感じるに至っている。

しかし「文明」のための装置はそれだけではなかった。広大なアメリカ大陸を文明化していくための装置の一つに、大動脈となる鉄道の存在が不可欠であることも、彼らは知るようになる。そしてそうした切り開かれた土地に軍隊を導入して、その土地の国土化に抵抗する異種の存在を排除しつつ、いかにして街を形成し、そこに集った人々を同化させていくか、その仕組みについても次第に知識を得ていったのであった。

このようにアメリカという文明を相対化し、その形成過程を分析することが出来るようになったのは、まぎれもなくアメリカ西部の荒野を旅した数週間があったからであった。当初サンフランシスコで文明との出会い、衝撃に打ちのめされた彼らであったが、次第にその化けの皮をはく光景に触れ、アメリカが必ずしも最初から文明国ではなかったこと、その形成過程は苦難の連続であったことを知って冷静さを取り戻すとともに、その秘密、すなわちまったく文化も思想も宗教も風習もそして人種すら違う人々を一つの「国民」に仕上げていく過程について知りたいと願うようになる。

ソルトレークからクレストン高原を経てコロンボの街に入った時、そこはまだまだ開拓途上の小さな村であったが、一人の男と出会い、その言葉を聞いたことが、そのヒントを与えてくれた。彼は久米にこういったのである。<sup>18)</sup>

当村はすでに寺院三宇と学校を一つ建て、次の小村も寺院はすでに建て、学校を建てる評議中である。寺と学校

が建つ頃には必ず売春婦の巢窟が出来る。三つ揃うと荒野が文明の巷になる。

久米はこの言葉に驚き、書き記し、そして思索を重ねていくうちに最終的に次のような結論に至った。<sup>19)</sup>

人種の衰滅が事実において起る場合は甚だ稀である。インディアンにせよ、アイヌにせよ、決して衰滅したのではない。衰滅したものは彼等旧来の生活態度である。彼等の服装や言葉が新来者と同様になり、一寺に会して同じ宗旨の説教を聞くに至ったのである。若しも彼等が全く衰滅したものと認めるならば、我々が斬髪し、洋装し、洋食しているのは日本人の衰滅と見なさねばならぬが、我々の中でキリスト教を遵奉し、洗礼を受けた者でも、其の稟性は日本人で、本物のヨーロッパキリスト教に同化できていない。

それならば何も恐れることはない。日本人が日本人でありさえするのなら、どんどん外来の優れた文化や習慣を導入し、積極的にそれまでとは違う一つの統一した文化を創設し、新しく「国民」を創設していけばいい。

そのことに気付いた久米たちにとって、残りの旅の意味は定まった。後はどの国のどの方法が日本に一番向くかを比較検討していくだけである。かくして岩倉使節団の基本姿勢は定まった。そしてこの瞬間に日本型国民国家形成へ向けた動きは明確に一つの方向性を持ち始めたのである。

## おわりに

岩倉使節団はやがてオマハの街につく。サンフランシスコ以来久し振りに出会う文明の街を見て、久米はこれこそ大西洋文明が西へ向かつて伸びた終点であるとし、これ以东が「米国文明の地である」と述べている。<sup>20</sup>

しかしこれまでの「人外の境地」を旅行したことは、彼らにとつて大きな意味を持つていた。この時間があつてこそ、彼らは文明の意味に気付き、それを相対化しえたのである。そしてその結論が国民国家形成の原型であつたことに我々はもう少し注目しておく必要があるのではないだろうか。

## 注

- ① 奈良本辰也『近世封建社会史論』(要書房、一九四八年)。遠山茂樹『明治維新』(岩波書店、一九五一年)。井上清『日本現代史』(明治維新)(東大出版会、一九五一年)など。
- ② 石井孝『明治維新の国際的環境』(吉川弘文館、一九五七年)など。遠山茂樹「時代区分論」(旧版『岩波講座 別巻1』)では、維新の始期を封建支配層内部の絶対主義化にみるなら天保期、外庄に見るなら嘉永期としている。
- ③ 田中彰『明治維新政治史研究』(青木書店、一九六三年)、芝原拓自『明治維新の権力基盤』(御茶の水書房、一九六五年)など。
- ④ 丸山真男『日本政治思想史研究』(東大出版会、一九五二年)、『現代政治の思想と行動』(未来社、一九五四年)など。鹿野政直『日本近代思想の形成』(新評論社、一九五六年)も。
- ⑤ 佐々木潤之助『幕末社会論』(塙書房、一九六九年)、高木俊輔『明治維新草莽運動史』(勤草書房、一九七四年)、色川大吉『新編明治精神史』(中央公論社、一九六九年)、安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』(青木書店、一九七四年)など。

- ⑥ 石附実『近代日本の海外留学史』（ミネルヴァ書房、一九七二年）など。犬塚孝明・宮永孝などこの分野の追隨研究者は多い。また来日外国人に關しても、梅溪昇らの御雇い外国人研究を始めとして続々と公刊され続けているが、彼らが「近代化」に果たした役割を否定的にみようとする研究も出始めている。
- ⑦ 田中彰・高田誠二編『米欧回覽実記』の学際的研究（北大図書出版会、一九九三年）など多数。また細分化でいえば、岩倉翔子編『岩倉使節団とイタリア』（京大学術出版会、一九九七年）や高田誠二『維新の科学精神』（朝日選書527、一九九五年）などがある。
- ⑧ 西川長夫・松宮秀治編『米欧回覽実記』を読む（法律文化社、一九九五年）など。
- ⑨ 毛利敏彦『明治六年政変の研究』（有斐閣、一九七八年）
- ⑩ 坂野潤治『近代日本の国家構想』（岩波書店、一九九六年）
- ⑪ 宮永孝『白い崖の国をたずねて 木戸孝允のみたイギリス』（集英社、一九九七年）、五十嵐暁郎『明治維新の思想』（世織書房、一九九六年）など。
- ⑫ 田中彰『脱亜の明治維新』日本放送協会、一九八四年
- ⑬ 『久米博士九十年回顧録 下巻』宗高書房、一九八五年（早大出版部、昭和九年の復刻）219頁
- ⑭ 同 222頁
- ⑮ 現世で七人の妻を持ってないものは、天国に行けないとする考え方。富を持ち、力と人望のある人のみが多くの妻を得て最終的にも救われるという、そうでないものからすればかなり絶望的な教義。
- ⑯ 前注⑬『回顧録』206頁
- ⑰ 同 211頁
- ⑱ 同 225頁
- ⑲ 同 238頁
- ⑳ 同 227頁。『実記』文庫版（一）161頁にも「オマハニ至テ、始テ人境ニ届ルヲ覺フ」とある。

(付記) 本稿は、一九九八年夏に、杉橋隆夫、本郷真紹、山崎有恒の三名で企画実施した、岩倉使節団の足跡(特にアメリカ西部における)を追う、実地調査の成果の一部である。私的な話で恐縮ではあるが、家根祥多教授の生前、上記三名と家根氏の四名で宴を囲む機会が何度かあり、その際文献史学を専攻する私たちに家根教授が繰り返し説かれたのが、現場に出ることの大切さであった。私たちは、その頃岩倉使節団について共同研究を企画していたが、家根氏の言葉を受けて、実際に使節団が歩いた道のりを同じように旅してみようと思いつに至った。そして実際にアメリカ西部の大荒野を旅し、その寂寥たる光景を見ていくことで、使節団のメンバーが受けた衝撃、特に最初に訪れた大都會、サンフランシスコとの落差について思いを馳せるに至った。本稿は、そうした道中での会話をヒント・アイデアとし、それに山崎が史料調査を加えて立体的に再構成し、さらに過去の研究史における岩倉使節団の扱われ方とその問題点を加えることで論文として成稿したものである(ラフスケッチではあるが)。今回、『立命館文学』で故家根祥多教授の追悼特集号が組まれると聞き、本稿を掲載しようと考えた理由は、氏の言葉がこうした研究の一つの原点になっているからである。あらためて感謝の意を表すると共に、そのご冥福を謹んでお祈り申し上げたい。

たしかに現在の文献史学の世界において、現場主義が語られることは二三の例外を除けば極めて少ない。しかしある種の研究テーマ、例えば本研究のように、異文化との出会いの中で人々が受けた衝撃を明らかにしていく場合などは、実際に彼らと同じ場所に身を置いてみることで、彼らの心象風景にシンクロしていくことも、それなりに有効な手段となりうるのではないだろうか。今後そうしたアプローチが多く出現することを願って攔筆することとする。

なお本稿は、一九九八年度立命館大学学術研究助成(一般)「久米邦武の思想形成における海外体験の影響」(研究代表者杉橋隆夫)の成果の一部でもある。ここに改めて付記すると共に、助成を与えていただいた関係諸機関に心より御礼申し上げます次第である。

(本学文学部教授)

(本学文学部教授)

(本学文学部助教授)